

い時代の希望と出会っているのである。

(堀 正嗣)

田中俊也 編著

『コンピュータがひらく豊かな教育』

～情報化時代の教育環境と教師～

北大路書房（1996. 4）

教育の世界にも、コンピュータという新しい双方向性をもつメディアが積極的に導入され、いつでも、どこでも、誰でもが使える方向で、施策がとられてきている。ニューメディアという言葉が下火になったかと思うと、マルチメディアがクローズアップされ、昨今では通信系つまりインターネットに、興味・関心の重点がなだれを打つようにして移動している。日本教育工学会での発表、各地での研究会、専門書、月刊誌と、どれをとってみても、このようなトレンドの移動が鮮明に読みとれる。

コンピュータがわが国の学校に入るようになって約20年、この間にその利用の仕方、メディア環境、それになによりも拠って立つ学習理論などが、劇的なまでに変化してきた。しかも今日なお学校現場では、この間の新旧の利用法が混在し、旧式と新式の機種も混在し、流行だけが先行し、ということからもたらされる混乱・分裂が広くみられるのである。

本書はこういう実情の中で、世に問われたのである。たまたま同じく関西大学に席を置くということになったが、それは別として、教育工学と教育方法学を撚り合わせたような分野を攻めている私にとっては、見逃すことの出来ない好著といえる。

(1) 教室における「教え～学ぶ場の考察」、

例えば教育技術の法則化運動、有意味受容学習、発見学習・探究学習、そして社会的構成主義に立つ学習などが、一つの尺度上に位置づけられ、多少の粗雑さはあるが考察を加えられている。そしてこれが、筆者達が現実のメディア環境やそこでの学習の実態を分析し、方向付けをしていくための視点となっている。第2章において、知識論・認識論に踏み込み、「知の社会的構成主義」という編者の立場を明示している。そしてこの立場に立つ具体事例を第7章に配置している。コンピュータ関連の類似書には、こういう視点からの構成や切り込みが欠落している例が多い。

(2) 第3章においては、学校の情報化対応の流れが、正確かつ緻密に記述され、わかりやすい図化に工夫を払い、資料としても貴重な価値がある。しかも資料紹介にごく短く、適切なコメントが加わっている。

(3) 第4章では、約20年に及ぶコンピュータの教育利用の変遷が、具体例で示されている。初期のCAIから最新のマルチメディア利用まで、外国の事例、全国各地の実践事例、教師の英知の結晶ともいえる富山や東京での活用事例など、ばく大な事例・資料を鮮やかに要約している。若い研究者や教師達には、この章で「実践の流れ」をつかんでほしい。

(4) 第5章では、通信系のマルチメディアが注目された現実もふまえて、通信工学の知見から新しいコミュニケーションの仕組み、用語などの解説がされており、電子メールやWWW、電子掲示板などの利用へのガイドにもなっている。

(5) 第6章は、編著の得意分野である評価論が展開されているが、他の章とはやや分離した感じがしないでもない。教育評価を正面から論ずるのでなく、コンピュータの得意とする定量的な分析・評価と、そうとはいえない定性的な評価での新しい活用の仕方、こういった分野に、積極的な切り込みをしてほしいと思う。

(6) 各章末に見開きでおかれたコラムが、傑

作である。学校現場での具体的な利用例やそこでの悩みから、大学や先端技術研究所での総合情報通信網の取り組みまで、適切な執筆者を配して、すばらしい「息継ぎのページ」に仕上がっている。

本学のマスコミュニケーション学専攻の私の担当講義で、この96年度に本書を紹介して、学生が2回にわたって発表をしている。総合情報学部での専門演習でも、基本文献にあげてきた。学部を越えて、知見の交流をはかるよき同志を得られたことを、心から喜びたい。

(総合情報学部長 水越敏行)

山下 栄一・井上 洋一 著

情報化社会と人権

(株)明石書店(1996.9)

本書は関西大学総合情報部の基幹科目である「情報と人権」を1996年度より山下栄一先生が担当されることになり、その講義に向けて執筆されたものである。

大学の「教科書」の場合、内容・文体ともに固く、無味乾燥な印象を与えるものが多い。そうした中で、本書は内容・文体ともに読者の側に寄り添って書かれており、わかりやすく親切である。また、16のコラムもあり、この分野について考えるために不可欠の情報と論点を明快に整理して提供している。その意味で、「情報と人権」についての最適の入門書であろう。

また本書は、読み物としても興味深いものとなっている。この主題に誠実に向き合おうとしている著者の生きる姿勢が、読むものの心を動かすからである。その意味で、「教科書」とい

う枠を超えて、いまの社会と人間のあり方について考えていこうとするものに多くの示唆を与えるものとなっている。

この本のねらいは、「情報という視点から人権の意味を捉えなおすことと、人権という視点から情報の取り扱いにはどんな留意すべき点があるのかを考えていくこと」である。そのために、人権概念の整理の上に立って、表現の自由、マスコミ報道、差別語・差別表現、情報公開、情報へのアクセス権について論じている。そして最後に著者たちのめざす共生社会について提起している。

私がこの本から学んだこととして、「両義的な見方」つまり「理想をもとめることと現実を直視すること」がある。情報化社会の評価について著者たちは、「管理社会へ傾斜していく危